

日本書紀傳

廿一卷
三

和書
號

日本書紀傳

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156(73)	
函號	待	85 1



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

教部百
文庫

古書
文庫

國書
文庫

四一六八三號

の菅草を所知し給ふ義あり然る物あり其神食薦
又神樂採物の條更なり 韓神小取枯藪を
 の如きも其神の仕奉給ひ一事今云ふ限ふ味ふ
 り又其五百五十五丁 小云る素交鳴尊の節折の篠竹又
 後具の菅葉を令採らる如きも此神所任し給ふ
 可き御事あり此を以て此野薦之八十玉籤ハ上ノ謂
 ゆる天ハ重神太玉串の類トハ異不其用ハ狀甚異
 ありと知へキあり然るを各重遠説不薦小竹也野薦
 者有ハ誤あり通證不但玉籤不必竹珠而貫虫以獻神
 輪者不可謂之籤耳と云るハ實不然言あり思混不
 可ら〇凡此諸物皆來聚時と云ハ右件ハ已不註
 如く命令の文あり古語拾遺不宜令太玉神率諸部神

造和幣云々と有る文不當り其終不其物既備云々と
有る其作法の較略を云ひ次に儲備既畢具如所謀と
云て其行事を云ふに相當ぬ其心一々見へきか
り備此に諸物皆來聚と云ふ一譬へハ山雷神ハ五
百箇真坂樹野篁八十五載を天香山採り野槌神ハ五百箇
野篁八十五載を郊野不令採れ其此祭場不持
聚より來るを云事あり四時祭式ハ祈年祭條ハ前祭
十五日克志部ハ人木工一人
合造供神調度とハ此不謂ゆる右神件の諸神ハ幣帛
の事を令せ各々相造りしめらるゝ不同じ次に
致齋之日平明奠幣物於齋院案上并○神祝祝之此云
案下と有る此の文と等しき所あり加武保佐枳保佐枳一第三一書ハ於是天兒屋命云

天玉命相與致
其祈禱云々

而廣厚稱辭祈啓矣于時日神聞之曰頃者人雖多請
未有若此言之麗美者也云々之見之古事記不ハ天兒屋命
布刀詔戸言禱白而云々と有る是あり私記不ハ是謂
云ハ口訣云神祝祝之祝詞也上說天兒屋命
以神明之祝文而祝申云々所見たり儲祝云ハ常不保具
と訓む字あるふく神功皇后十三年御記不皇太后奉
觴以壽于太子因以歌曰と有る御歌ハ中不等與豫保
保枳枳茂苔陪之訶武保枳保枳玖流陪之と有ハ私記
不豊祝と廻神祝と狂と有ハ如く保枳と云ハ不貫不當
なり大殿祭詞不言壽と有る下不古語云許止保企と
所見たる此保の言ハハ神功皇后御紀あり神の御

公より聞えて
 天孫降臨章第
 一書小咒ノ字を
 保政白と訓し教
 明天皇二十三年
 御紀小咒ノ字を
 保政と云訓有と
 以て善乎小咒
 字小通ハ一云
 事を知へ

託言小幡菟穂出吾也と有る穂みて思の外小表ハる
 多を云て四神出生章第十一書小作已を意母保傳
 流と訓と又万葉小榜船凶真帆尔 妹尔云と詠る
 るとハ更あり保能煩能又保能賀良加ふと何れも同
 意ある是あり具ハ擧の略あり此を保其と云ハ穂
 擧みて心不思ふ事を言擧めて仄めく事を云あり然
 ハ如此く物を擧稱へて保具と云より外小悪一書方
 不通ハ一云て然る可き語ハ状ハ有れと此を
 善き方ハの用あり保小秀ノ義を備へたるハ改
 但此の保伏久ハ右の保具とハ等シク思合可保
 ハ右小云る穂出吾也又作色ふとの保小て日太神の

御赫怒り坐る大御心を云るより佐久ハ折みて古説語
 拾遺小於是大地主神令片巫眩巫占求其由御歳神為
 崇宣云て以解其怒依教奉謝御歳神之所見たる解又
 同ト意ある可ト日本後紀延暦二十四年二月石上太
 神の御怒坐る所小召彼女巫令鎮御魂女巫通宵怒怒
 託語如前延明乃和解とハ所見たり今ハ人の怒の稍
 く小和くを解ると云又人の心の和めりかして
 憤イカハ一曰状無多を佐久伊と云ると同義あるを思合
 不可し記傳ハ五下小詔戸ハ宣説言ある可し説ハ書
 紀小太諄辞と書る諄字の意あり説文小告曉之熟也

公周礼の大祝掌六
祝之辞と云の字
小祝下章也請承
之辞と有を借して

と云り久度久と云言し此宜説言の意近し俊頼朝
臣歌小始無き罪の積りの悲しさを奴頭加の聲と久度
伎つる哉い有る久度久いせ小詢をも認をも口説を
も訓クナトシ諄説の義ある其も人の心俗云と同一小我云事を強て
甘ふらむむと為る由ふぬ保佐久の佐久と久度久
の登久と同一意味ある此の神祝祝之ハ皇太神の
御奴心を解奉ふむと為て奉謝いを云ふぬ言壽
多との保企いと同一いと云ふ外言意は同し事多有り常々字の
無所見為小祝字い書仕たりし者小ふむ有ける通證ハ
俗不慝情而盡言曰保佐久蓋祝之遺也と云い或諸今俗又
人の情の打乱れて憚らむ感るるを布邪邪流と云る

を東國あり小兒の事い西國あり多い男女
の間不云し右の轉あり又大同類聚方い保佐紀可太
と云條有て宝豆又波那非別又斯波不奇又保左區
別又無南迦反里又於昆津起又他麻非又反比俚と有
るどい身中い含めるい火能の外い出る病の類を云ぬ
い此保佐紀可太い火祚方と云義あるい佐久の例ふ
り思合借神祝祝之と如此く重詞い云る語ハ神集い
り可い神議ニと云い小等い其事を諄いと成い行いふ義あり
其ハ此事を古事記い天兒屋命布口詔刀言禱白而
と見えたるい此い第三い書い小乃便い天兒屋命掌其
解除之太諄辭而宣之焉と有て其行ふ所い異いぬ
と祝詞の言ハ同一い右い小諄辭の字と被用たるい
其事を諄返い申し宣る事い中臣壽詞い此玉櫛遠

右石上大神の
御崇の事と云る
御通言を延延語
如前座明なる神
の御坐の解さ
は在り坐を延
諄返し祈言
趣あり右の同
猶傳二十二箇
より考合を

刺立氏自夕日主朝日照氏天都詔戸乃太詔戸言遠以
 氏告礼如此告波麻知波弱菲仁由都五百篁生出年自
 其下天八井出年有夕日より朝日照不至追其
 同一事を諄返し唱ふ可き由を已小天神より教悟さ
 せ給へる此時小天見屋命の然為させ給へる例を
 以て宣へる今俗ふし真言を諄返と云時ハ幾百
 千返と無く返さひ唱ふも我古義の神家小絶て
 釋徒不遺水者あり万葉十三卷六下小真浪来因漢
 目乎欲之有る久礼此ハ毛詩小諄を然訓る同
 朱子云詳語之類と見え廣韻小の諄を註不詳熟也
 諄者之下寧也有ハ祝小又同の於是日神方開磐

戸而出焉と有る此ハ其神祝と奉りし事を聞者一感
 けさせ御在り坐て出坐る趣ありを甚く切たりし者
 あり小第三一書小於是天見屋命云々而廣厚祢諱祈
 啓矣干時日神聞之曰頃者人雖多請未有如若此言之
 麗美者也乃細開磐戸而窺之云々有る所ハ當て心
 得へき者なり又正書小猿女君遠祖天鈿女命則手持
 茅纏之稍立於天石窟之前巧作俳優云々一節ハ凡
 て略り水々唯其祈言不感ハさせ給ひて御身自其磐
 戸を開らせ御在り坐て出坐る趣ありを別小一傳
 之云あり非此ハ其事小出依不出させ給ひ大綱を云う右の如く幣物の出来りる事を云下

其祭主と坐す天兒屋命の專神祝ひ不祝ひ給ひし事
を立了云故不其縁不引れて其餘の事共ハ漏たる者
多しハ他の傳て不比較へ考ふ可き事云々更あり然
さハ天鈿女命の排優して其大御心を取奉らば
事件ハ更あり天手力雄神の御戸開の功用ハ何ハ隱
るハ竟る事あり然るハ御紀の例として正書不委
事ハ一書不書されハ一書不詳ふる事ハ正書不略
くハ相交へ読へく心〇以鏡入其石窟者ハ傳十九
四十六不此文を挙て論め云るハ如く日神の全く磐
戸を出離らせ御在し坐さるつる以前の事あり正
書不御手細開磐戸窺之と見え又右不引る茅三一
書不乃細開磐戸而窺之と有る程の御事あり其委

しき狀ハ古事記不此種ノ物者布刀玉命布刀御幣登
取持而天兒屋命布刀詔戸言禱白而天手力男神隱立
戸掖而天宇受賣命^略云々於是天照太御神以為怪細
開天石屋戸而内告者云々尔天宇受賣白言益汝命而
貴神坐故歡喜咲樂如此言之間天兒屋命布刀玉命指
出其鏡示奉天照太御神之時天照太御神逾思奇而稍
自戸出而臨坐之時其所隱立之天手力男神取其御手
引出之所見たる其御手より出させ御在し坐て彼御
鏡を奇しと見行ハて坐ける時不其御鏡不其大御心の
移るり也御在し坐る其間隙を得て手力雄神の御

戸を抛給ふ所を透さす天鈿女命其御手を奉承りて
引出し奉らす時其御鏡を石窟に入奉りて中臣神
忌部神即端出之繩を思ヒキマタ以し奉らるるなり其次第を
思ふも此小日神方開磐戸而出焉と有る其事の始
終を云ふ文あり未全く出離水々を御在し坐さりし
以前あり可事次不觸戸小瑕と有る戸以其磐戸不在
りして何を云ふ此を以て其戸を未引開け竟さる
し程の事あるを思ふ可き者ありし
其御戸開神と
雄命天鈿女命二神小御在し坐す由其傳十卷四百
五十八丁云り此事誰し其甚く心得難し為め
事あり古より造不定なる説無きを師の古史第五十
六段あり磐戸を出させ給へる後の事と為て文を其

事の終不載次りれたる 其事古語拾遺あり於是從思
ひ思ひ誤りたりあり 兼神議令石凝姥神鑄日像之鏡中略儲備既畢具如所謀
尔乃太玉命以廣厚祢詞啓曰吾之所捧宝鏡明麗恰如
汝命之開戸而御覽焉仍太玉命天兒屋命共致其祈禱
焉中聊開戸而窺之爰令天牟力雄神引啓其扉遷座則
新殿云々として出たり其古事記と同一意ありけり
此小鏡入其石窟と云は其扉を引啓さりし以前
る事右不註るを以知へし偕此鏡を以て其石窟に入
奉らるる不別ある意有へり其八日神を奇しとせ
奉らるるとして彼鏡を古事記不益汝命而貴神坐と云ひ

此小室鏡明麗恰如汝命之拾遺不見之たるを日神を
戸より出奉りて臨よりめ奉らむと云事の下掛ふ
るを其謀りつる如く稍小日神の御戸を開き出さ
せ御在り坐しんは是が八百萬神等の祈思不事あり
伊れ真の日神を出奉りて新殿に移るハ奉り
て復還入るを給らむも事不勤めて其鏡の事不心
を懸へさ非る可けねハ日神の御手を奉養りて引
出奉る引替不其鏡ハ抛入る者あり然始よ
疑して日神の御像を仕奉る鏡を抛入ふ事ハ是無
礼キ状不有れと其鏡を作ると云日神を招出
給へるを余不見て其鏡をのり守居る可き非る

を思ふ可き者あり借此鏡を入る事不就て纂
疏入天無三日日神已出蓋意恐日神
復還入故豫防之也宣ひ直指不日神已不岩屋を出
給ひぬる上ハ先の祈禱の鏡用ひて何みらハ為む所
願成就する故不岩屋の内へ入奉らむと云る
と日神の石窟を出させ御在り坐ける後の事不見る
ハ誤るる上不其鏡を入奉る事不理
屈を附云々云み足ぬ推度ありし○觸戸ハ戸ル
都伎布礼氏と訓の俗不戸不突當りてと云む如し
借此戸ハ磐戸ある事已不右不註る如く第三一書
不是時天手力雄神侍磐戸側則引開之者日神之光満
於六合之所見又古語拾遺不爰令天手力雄神引塔
其扉遷座新殿と見えたりハ其扉を引開きて抛給ふ
時不突觸たる事あり又此を以て日神の磐戸を出さ

世御在_一坐ける後_不鏡を_入奉れ_る不_非事と曉_る
可_一右_不引_る古事記_不天照太御神布_力玉命指出_其鏡
示_奉天照太御神之時_其天照太御神逾思_奇而稍自_戸出
而臨坐之時_其所_德立_之天子_力男神取其御手引出_即布
力玉命以_尻久米繩_控度_其御後_方自言_從此_以内_不得
還_入之_見えたる_如く_彼鏡を_指出_て示_奉る_時不_日神
の_奇一_と所_思して_臨坐_る即_手力_雄命_ハ御_戸を_開き
天_鈿女_命を_御手_を取_り引_出し_奉れ_る其_間不_鏡を_投
入_て直_不端_出之_繩を_界以_て復_還入_る世_御在_一坐
り_しき_設を_成る_るとの_次序_を並_奉り_思ふ_不其_扉を

引_啓き_奉れ_る時_多む_其鏡を_抛入_て戸_不突_觸る_頃ふ
り_ける_一都_伎布_礼此_と訓_るハ_古義_を傳_へたり_し者
日_神を_還入_る世_奉れ_ると_後へ_廻る_と鏡_を投_捨
て_其設_を成_す事_の卒_ルと_思ふ_と相_突當_れる_由を
傳_へたり_し者_多む_其鏡を_抛入_て戸_不突_觸る_頃ふ
窟_と云_さる_心を_就て_思ふ_可し_都伎_布礼_ハ万_葉
八_三十_不草_枕旅_行人_毛往_觸者_尔保_比奴_信久_毛開_流
茅_子香_聞十_一不_不劔_刀諸_刃之_於你_荷去_觸而_所殺
鴨_將死_戀管_不有_者と_見え_又源_氏夕_顔卷_不如_何ある
伊_伎布_礼不_係ら_せ給_らる_や云_こと_有ハ_行て_物不_觸
る_と伊_伎布_礼と_由伎_布礼_{あり}此_ハ其_ハ不_別ふ_て
抛_落す_戸と_投入_る鏡_と行_當れ_ると_思ふ_と都_伎布_礼不

て實不叶へり決めて古言ある可し借觸と云例ハ古
事記不其天詔活琴拂樹而地鳴動之見え應神天皇三十
一年御紀不拈野船の事を由羅能斗能斗那珂能異句
離耳敷例多菟那豆能紀能佐椰てと有る敷例多菟
ハ釋不觸立也と有り又石不物の觸事を云ハ乃
葉十五不雨零者瀧津都山川拈石觸君之推情者不
持と見え相摸風土記不錄倉郡見越碕每有速浪崩石
海人号伊曾布利と有を乃葉十四不可麻久良乃美
胡之能佐吉能伊波久敷乃伎美我久由倍伎已許呂波
母多自己訓詠石觸と石崩石崩とを一不又二十十七

伊蘇尔布理字乃波良和多流あとも有り名義不觸字
加不流と許登尔とも字基久とも字都とも都久と
小阿伎良加也と註訓説文觸行亦也と云ひ字書
伎布流と訓實不然可○小瑕ハ古伎受都祁
理と訓り此ハ其磐戸不突當りて蒂の落させ給へる
を云あり此小瑕の御事ハ釋不引天德御記不天德
四年九月二十四日鑿采温明殿所紉之神靈鏡并大刀
契等申時重光朝臣来申云尾上在鏡一面其鏡徑八十
許頭雖有小瑕專無損圓規并帶等其分明見之者無不
驚感云云先師申云天德回祿之時伴神鏡内侍在灰燼
之中不燒損其鏡徑八十許頭雖有小瑕專無損之由御

記文炳焉と所見たる頭ハ下小先師申云御記文頭之
瑕者端之義歟且以頭字讀波多者當記之說也又有り
て次ふ云ふ葦の事あり借此御鏡の御形象ハ一傳
十九十百ハ九不此御記を引て註るが如く神宮古記不
八咫古語八頭也八頭花崎八葉形也故名八咫也申中臺
圓形座と有て右不謂ゆる圓規ハ申中臺圓形あり所を
申し葦ハ圓外花崎あり頭を申せるありハ其圓外ふ
る葦の所の一葉欵させ御在し坐を以て頭雖有小瑕
とい記されたる者あり若て其文を畢て次小先師申
云て云ふハ釋者の其文不就て言を成る所あるが下

文小大仰云御記文神鏡小瑕如何先師申云如舊事本
紀者以鏡入其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存云て此
文即載當紀之一書就之思之崇神天皇御宇被奉与此
神鏡之時不違本鏡鑄付件小瑕之條於焉明白者歟と
所見たるが如く瑞籬朝廷不鏡を改造らるる時小其
本鏡ハ露レ違レ所無く造作し仕奉らるるが為て此
時小付たりし小瑕をも其有し如く仕奉らるる故小
威所不御在し坐す御あり其葦ハ小瑕の御在し坐す
狀を見奉り被傳たりし者ふる有ける右の御記文
又帝王編年記等不御日記云て出たる此を扶桑略記
葦ハ八頭花崎の御事不御在し坐すを古史實纂疏不天

△敬告云不實觸て
敬告せ給へ

燒

今其頭花崎の中
不備一所の葉の
あり其証の寛弘
三年上月子刻許
内裏燒出者云々
火燒明殿神鏡
恐前大乃契啓不
能取出云々定神
神鏡大乃契書
神鏡大乃契書
燒亡鏡僅有帶自
鏡損無圓規其鏡
形之村上高記云
天德四年九月廿四日
燒亡云々廿四日
光朝臣申云竊到
温明殿所求見尾上
在鏡一面云々廿五
清遠伊勢等合申
又水得燒鏡一面云
故殿御日記云所
雖在火燒之中
曾不燒損云々廿
鏡似三面云々廿二
月九日九頭中將

來作立云今日酉刻神鏡自太政官奉移東三條院可供奉其事者云々十日額中將示送云神鏡昨奉移但聞舊
同神鏡持奉納新神鏡之簡忽然有日照耀院內待女官等同見神鏡猶新最是足驚者之有右の村工却記之
等甚以分明云々之有右の神鏡を以て一疵之出たる是也其神鏡の御説ハ

無二日日神已出窟故以鏡入其窟蓋日神久在石窟而
損其明故日像之鏡亦觸窟而生小瑕物之相感自然之
理也之有云々云々神屈不泥云々神説あり口訣不
觸戸小瑕者不覺手舞足蹈貴敬之甚也云云ハ火く
徳与云々云々猶此の借其磐戸小突觸戸小瑕付
次序小階云々説ある云々
世々世給へる御鏡の御説ハ一師説不熱田鎮座記
不謂ゆる天火徹云々御火打云々由玉禪不説此
多ハ實不動くす云々説不あり有ける其據ハ景行天
皇四十年御紀東征の所小冬十月壬子朔日本武尊發
路之戊午枉道拜伊勢神宮仍辭于倭姫命曰今被天皇
之命而東征將誅諸叛者故辭之於是倭姫命取草薙劍
授日本武尊曰慎之莫怠也是歲日本武尊初至駿河其

處賊陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝露足如茂林
臨而應將日本武尊信其言入野中而覓獸賊有殺王之
情王謂日本武尊也放火燒其野王知被欺則以燧出火之白燒
而得免一云王所佩劍叢雲自抽之推攘王之傍草因是
得免故号其劍曰草薙也叢雲此云茂羅致云
王曰死被欺則悉焚其賊衆而滅之故号其處曰燒津之
所見たる右小ハ草薙御劍の云々を賜へる状あり云々
古事記云ハ倭比賣命賜草那藝劍亦賜御囊而詔若有
急事解茲囊口云々於是者行其神入坐其野尔其國造
火著其野故知見欺而解其婁倭比賣命之所給囊口而
見者火打有其婁於是先以其御刀折撥草以其火打而

△有り又鎮座記
皇女取御事傳
授曰慎莫怠也

打出火著向火而燒退還出之有て此少其御劍小燧
を添賜へる事正しく所見たれ又熱日縁起大神少倭姫
命感其心授一神劍曰努て力も莫離於身又賜一囊曰
若有急事解茲斯囊口倭武尊拜領劍囊行略倭武尊到
駿河之時賊師師陽從之中放火燒野略其所帶神劍自
然抽出薙四面之草又開所持囊中有火打一枚驚喜敬
父向燒得免之所見たれ御紀不其囊を賜へる事の
載れざるも事實相同し有れ其主たる方を奉
て其一も略れたる者ありけり其古本裏書不兼
文案之今世俗號
火亦囊付于刀者可為此因縁也有興事也之云ひ後撰
集小東へ行く人小火打を贈る事折る小打て燒火

△其を源平盛衰
記不倭姫命の劍に付
て賜へる御燧之申
す天照大神我御
祭と末の帝正見せ
奉らむとて御鏡
不取を給ひける
と云ふ成り給へり
其燧を御鏡に入
りて今世迄入の腰方
けり燧袋と云ふ此
事ありて有る天
照大神とてこの事
ハ誤りなりと取
落せる所鏡の御
即火打たる事甚
愛たれ傳ふ事若
其燧を御鏡へ
て

の煙有る心佐須賀を忍ぶと云ふ思ふと有る鏡少佐
須賀ハ腰切あり燧不附由く云ひ又同集遠處へ
罷りける支等小火打添て遣しける此旅吾を志
るを委し其御説鎮座記不後號此燧天火徹俗號
燧袋月副大小刀其縁也之所見たる天火徹と云ハ後小
號たりし者とい思し可決めて古き稱と聞えり
り倭姫命の此時小掛よく其可畏き天照日
太御神の御像之齋奉る大御鏡の御欽を自由御許
私不
燧て成りて日本武尊不賜ハ給ふと云事ハ私の
御振舞の如く見えざる給ふ不就て熱く其事の本を
探索る其磐石不觸て小殿の付りし時ハ大小激り

今神号成り地
名成つひを自
然神の御心あり

次此即伊勢崇
秘大神也所見
たの崇秘の字を
以て

あハ熱字を富登富理と訓るを思合す可又縁起
小此是宮酢姫會集新舊相議曰云々占社奉遷神劍衆
議感之定其社之地有楓樹一株自然炎燒例永田中光
焰不銷水田尚熱仍號熱田社と云るハ熱田の字不
て説を成せり如し之雖も若くハ右の天火徹り
自然不火の炎出て然る實事の有けむらと思はる
り○其瑕於今猶存の存字ハ宇世受と訓来り然る
可し借此小以鏡入其石窟者觸戸小瑕と云こ此日神
の大御鏡いひし古より誰ハ見奉り知る事の有む
然る不此御紀を撰成一給へる養老四年庚申より年數凡
二百四十年を経て天徳四年庚申不其小瑕の御在
坐す御有状を見奉りて御記其あり書され世人の驚奇
し之奉る不就る神代の古傳は信不疑ふ可くぞ

る事をふむ知へりける斯る例ハハハ猶外あり有
る事あり下章第六一書不其後少彦名命行至熊野之
御碕遂適於常世郷矣と見え又天孫降臨章第二一書
小大己貴神の事を吾將自此避去即躬披瑞之八坂瓊
而長隱者矣と有る大倭神社注進狀不引るハ即躬
披瑞之八坂瓊而長隱常世郷者矣と見え之ハ二神共不
常世郷小御在し坐し古傳あり然る不文徳天皇實録
不齋衛三年十二月庚午朔戊戌常陸國上言鹿島郡大
洗磯前有神新降略中時神憑人云我是大奈母知少比古
奈命也昔造此國訖去往東海今為濟民更亦來歸之見

△因云右の小瑕ハ
 上引る天徳御記
 少出たる中右
 記小村上御記と
 引るあり一説と有
 て其ハ頭一帯の
 軟さを結へるあり
 若く其圓規ハ其
 疵の係らざる證ハ
 輔行記云佛書
 小玉之外病為瑕玉
 之内病為疵之
 る瑕ノ字是るれ
 あり

えらる此ハ御紀の御撰有しよりハ百三十七年後の
 事ある不斯る信驗有り天地の弥遠長き間中み猶幾
 許り出来りむ御紀の撰者等然る未來の事迄て知
 て筆てり記し置く事の有む神代の古傳ハ凡て然り
 凡俗の輩みハ意表ある事ある故小人皆此を疑ふと
 雖も生狭き己ハ狹智ハ引合せて信ハざるあり
 有けぬ天地の弥遠長き間ハ如何ある奇異ある神
 の御所置を眼前ハ見奉る事の絶て無き者ハ
 如何ハ云へりむ其時ハ至りて後悔ハ所詮無き
 合ふ事有る以て其餘ある萬事ハ必合ふ所有るを
 思量る可き者あり是る我ハ皇学の学則ありける

○此即伊勢崇秘之太神也ハ傳二十七五下不註る如く
 古語拾遺ハ於是從思兼神議令石凝姥神鑄日像之鏡
 初度所鑄ハ不意是紀伊國日前神也次度所鑄其狀美麗是伊
 神マ所見たる其初度所鑄ハ云ハ第一一書ハ故即以
 石凝姥為治工採夫香山之金以作日矛又全剝真名鹿
 之皮以作天羽鞆用此奉造之神是即紀伊國所坐日前
 神也マ有る是めて日矛ハ謂ゆる茅纏之稍あり其鏡
 ハ其鋒端ハ著たり故ハ日矛ハ日矛の名有る由己ハ
 云る如く若く次度所鑄ハ云ハ此ハ此即伊勢崇秘
 之太神也マ有る是あり大倭本記ハ天皇之始天降來

之時共副護齋鏡三面小鈴一合也之有る本註小一鏡
 者天照太神之御靈名天懸太神也今伊勢國磯宮崇敬
 拜太神也一鏡者天照太神之前御靈名國懸太神今紀
 伊國名草宮崇敬拜太神也略之有て此伊勢の御を天
 懸太神と申奉り日前的御を國懸太神と稱奉れる天
 天照一國照一坐す義を以て號分け奉れる者あり但
 懸太神國懸太神と申せり本あり日神の大御名小
 御在坐す又五十鈴宮名草宮御在坐す御靈
 の御名を然稱申せる由を以て稱奉れる小即其
 小照名や給へる由を以て稱奉れる小即其
 鏡の御名あり事あり口訣不伊勢崇祕之太神也者此御
 明くも可き者あり天孫至代開化天皇御同座崇神天皇畏神威所
 鏡自天孫至代開化天皇御同座崇神天皇畏神威所

△故天照太神賜
 天津彦火瓊瓊杵尊八咫瓊瓊玉
 及八咫鏡草薙
 劍三種宝物
 有る其御鏡の
 御事を第二ノ
 書小

遷宮經邑十一 至仁天皇御宇大倭姬命頂戴鏡劍而鎮
 坐度會郡五十鈴河上大神宮之御正體也以垂仁天皇
 之所見たる如く此の後小其大御鏡の鎮り御在坐
 御在所を書し傳へたるあり諸天孫降臨章第二ノ
 書小是時天照太神手持宝鏡授天忍穗耳尊而祝之曰
 吾兒視此宝鏡當猶視吾可與同床共殿以為齋鏡復勅
 天兒屋命太玉命惟尔二神亦同侍殿内善為防護之見
 之又古事記云は於是副賜其遠岐斯八尺勾瓊鏡及草
 那藝劍亦常世思金神云云而詔者此之鏡者專為我御
 魂而小拜吾前伊都岐奉次思金神者取持前事為政此

裔二氏更鑄鏡造劔以為護御璽今踐祚之日所獻神璽
鏡劔也仍就於倭宮絳色殊立磯城神籬奉遷天照太神
及草薙劔令皇女豐鍬入姬命奉齋焉略之所見たる以
時より始て皇太神の神威を畏奉らせ給ひて鏡劔を
し別處不出し奉らせ給ひて皇宮より其御模造を
留めて上世の眞の御物の状を持齋を奉らせ給ふ御
事と成れるあり然るに皇太神の大御言ふ吾見視
此宝鏡當猶視吾可與同床共殿以為齋鏡之詔給へる
趣不違ひ奉らせ給ふ如くありし其共住不安と云
ハ已不其時の大御心不御在し坐せハ其御模造を造

奉りて上古の神勅の如く皇大宮不齋奉らせ給ふと
云も亦皇太神の大御心不御在し坐せハ其神勅不露
も背奉らせ給ふ所御在し坐さる事次條不云を見て
知る可きあり世人此御事を怨たきて上古の神勅不
相違有る如く思取て其旨尾相貫ぬり
さる如く云めり却心の至り浅き空歎きと云者
あり若此を思し事と為る時ハ後不皇太神の伊勢
不鎮り御在し坐せ其神威の眞盛り不坐す御事
を不係り世不禰ハしうぬ事と云不當れハ其
可畏事ありけり皇大宮の内不留らせ給へるハ御
模造あり御在し坐せと其眞物不少り違ふ事無
く写奉り又其皇太神の御靈を齋奉らせ
御在し坐す上ハ何の異なる事ハ坐む若て坐仁天
皇二十五年御紀不三月下亥朔丙申離天照太神於豊
躬姬命託于倭姫命爰倭姫命求鎮坐太神之處而詣覽

田枝幡（此）更還之入近江國東迴美濃到伊勢國時
天照大神誨倭姬命曰是神風伊勢國則常世之浪重浪
歸國也傍國可憐國也欲居是國故隨天神教其祠立於
伊勢國周興齋宮于五十鈴川上是謂磯宮則天照大神
始自天降之處也之所見たる其鎮座の御事ハ其下ハ
一云天皇以倭姬命為御杖貢奉於天照大神是以倭姬
命以天照大神鎮坐於磯城嚴樞之本而祠之然後隨神
誨取丁巳年冬十月甲子遷于伊勢國渡邊宮之有る其
丁巳年（冬十月）倭姬命世記ハ垂仁天皇二十六年秋九月甲
子奉遷于天照大神於度邊五十鈴河上之有る如く秋

九月之有る勝る可く其ハ通證ハ冬十月當作秋
年十月無甲子九月十七日為甲子至今內宮祭日也此
有不據て去あり然る不元ニ集及神名秘書ハ引る不
ハ倭姬命世記曰二十六年丁巳冬十月甲子之有る去
りて御紀の文不合さるを以て改め引れたる者あり
不誤あり備右ハ故隨天神教其祠立於伊勢國之有る
始より皇太神の志ハ給ふ所あり由之聞えたり其ハ
世記の御鎮坐の所ハ爾時皇太神倭姬命乃御夢喻給
久我高天原ハ坐懸戸押張原如見見志真伎志國宮處
波是處也鎮理定理給止覺給支之見え此のハあり
等由氣宮儀式帳より天照坐皇太神始卷向玉城宮御
宇天皇御世國ニ處ハ大宮處求給賜時度會乃宇治乃

伊須^こ乃河上^乃大宮供奉^尔時大長谷天皇御夢^尔誨
覺賜^久吾高天原坐^且見志麻岐賜^志處^尔志都真利坐
奴云^こて見えたる一ハ珠城朝の御世一ハ朝倉宮の
御時の御諭^あり^とも共不同^一狀^ハ高天原の朝廷^よ
り押齋^り一見^一求給^ひ一地^ハ不鎮^り定^りせ給^へる由
不詔給^へる^ハ此の同床共殿の神勅^ハ違^ハさ^を給
へ^る如く聞ゆる事^{あり}と^も然^る神勅の御在^一坐^る
づ^ら己^ハ不崇神天皇御世^ハ至^りて然^畏其神勢^共住^不
安^と云^ハ漸^く不其始^{より}志^し給^へる^所不鎮^り定^り
給^ハむ^と所思^一着^す時の至^{れる}ふ^く本^{より}其御摸

造の出来る^と云^七皇太神の大御心^ハ御在^一坐^て其
真の御^ハ写の御^ハ御靈^ハ不^於て異^とせ給^ハさ^りけれ
ハ其^を皇太宮の内^ハ不齋^うせ給^ひて同床共殿の神勅
不信^ハ違^ハい^せ給^ハさ^る御事^ハあり^む有^ける^然れ^ハ伊
御在^一坐^むと云^ハ皇太神の始^{より}の大御心^ハ又^其御
模造^を留^めて皇太宮を^守奉^らせ給^ふと云^ハ本^{より}
皇太神の大御心^ハ然^るハ則^{天照太神始}自^{天降}之處
也^と有^ハ不^甚く味^ひひ有^る事^{あり}て洎^十卷^向玉城朝令
皇女倭姬命^奉齋^{天照太神}仍^隨神教^立其祠^於伊勢國
五十鈴川上^因興齋宮^令倭姬命^居焉^始在^天上^預結^幽
契^御神^先降^深有^以矣^之見^えたる^此不^引合^せて^心得

へり事あり其結^續幽契禰神之云天孫降臨章第一
一書猿田彦神の出迎奉^所時天鈿女命の行向ハ
水^ハ是時禰神問曰天鈿女汝為之何故耶對曰天
照太神之子所幸道路有如此居之者誰也敢問之禰神
對曰聞天照太神之子今當奉行故奉迎相待吾名是猿
田彦大神時天鈿女復問曰汝將先我行乎將抑我先汝
行乎對曰吾先啓行天鈿女復問曰汝何處到耶皇孫何
處到耶對曰天神之子則當到筑紫日向高千穗穗觸之
峯吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上^甲略果如先期皇
孫則到筑紫日向高千穗穗觸之峯其猿田彦神者則到

伊勢之狹長田五十鈴^宮上即天鈿女命隨猿田彦神所
乞遂以侍送焉之所見たる此文中小著を所有り其ハ
此時小猿田彦神ハ皇御孫尊を待迎へ奉り小天
八達之櫛不出居給へるるハ皇御孫尊の行著セセ
セ給ふ可き處小何方^{三十七}ハ啓行^{三十七}奉る可き理あるハ
天鈿女命の問小汝何處到耶皇孫何處到耶之有る事
疑ふ可く又猿田彦神の對小天神之子則當到筑紫日
向高千穗穗觸之峯吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川
上之有る疑ふ可く又其神の言不固曰發顯我者汝也
故汝可以送我而致之矣と乞給へるるとハ殊小皇御

孫尊を奉迎する神として其供奉を仕奉るる却りて我
方不其部曲神を乞て送るしめたるありと甚と疑ハ
き事の極みあり有ける儲其疑ハ一節ハ皇御孫
尊の天降り給ふ所と皇太神の天降り給ふ所の
別あるあり是る拾遺本始在天上預結幽契禰神先降
深有以矣之云ふ當りて考ふ可き所あるありて其天鈿
女命の問ハ汝何處到耶と有ハ皇太神の到著せ給ふ
處を問るあり猿田彦神の對ハ皇太神ハ應到伊勢之
五十鈴川上と申せるあり其汝可以送我而致之矣と
乞へるハ皇太神を送奉りて我と共に致る可しと云

事ありて此時己ハ伊勢不鎮坐へき御幽契御在り坐て
五十鈴川上ハ天降り着せさせ給へるあり其より日
向宮不幸行しめ奉り其より以來皇太宮ハ大坐にけ
ろと果して神教不周て五十鈴川上不鎮給へる御事
ある其始猿田彦神の啓行き奉らしめ地あるを以
て則天照太神始自天降之處也とい有るありけり其ハ
神宮儀式帳ハ天照坐皇太神乃伊勢國度會郡宇治里
依古久志留伊須こ乃川上ハ御幸行幸時云ハ百船平
度會國依古久志留宇治家田ハ上宮坐支爾時宇治大
内人仕奉宇治土公等遠祖大田命宇治國名何問賜支
是川名依古之志留伊須こ乃川上申是川上好大宮國
地在申即所見好大宮地定比支朝日來向國夕日來向
國浪音不聞國風音不聞國止弓矢勤音不聞國止大御
意鎮坐國止悦給大宮定奉支と有る其大田命を侍

合有旅遺小因與
齋宮之傳命
居考之見之

合有之天武天皇七
年御紀是春將
祠天神地祇而天
下悉依禊之齋
宮於倉梯河上
多也

姫命世記不猿田彦神裔宇治土公祖大田命之見之
鎮坐へき宮處之定控て其時の至るを待奉り
又此の就て思出た事有り傳云卷九下不己不書せ
此の五十鈴川上不鮎石之云ふ大岩許多有り其の鮎
云貝の狀不似たるを以然称けたる由あり外不傳
船の形先思ひ有けれ此あり彼謂ゆる天磐船の類
神の天降らせ御在し坐ける時の磐船之云者あり可
く思定めたり此の余り不人知ぬ所あり其狀を行見
不過あり又右不興齋宮五十鈴川上是謂磯宮
とハ齋内親王の宮室の事あり然の云れさ
る事有り神功皇后御紀不更造齋宮於小山田邑之云
ひ又皇后選吉日入齋宮親為神宮之有ハ神祇を齋

せ給ふ宮を云て其祭主の屋を云ふハ非す此齋ハ右
小引る天孫降臨章第二一書不吾見視此室鏡當猶視
吾可興同床共敷以為齋鏡之見之古事記不此之鏡
者專為我御魂而如拜吾前伊都岐奉之有伊都岐小
て皇太神を齋奉る宮之申す義あり万葉二三下不渡
會乃齋宮從神風尔伊吹惑之天雲乎日之日毛不令見
常聞尔覆賜而定之水穗國乎又有ハ皇太神宮の御事
を齋宮之申せるあり然るを皇太神の御杖代と貢
奉り給ふ齋王其大宮の傍不御在し坐て任奉給へ
りしハい時ハ磯宮之云て未齋宮の名無りし事右小

是謂磯宮之有あり知り此又世記小倭姫命宇治機殿
乃磯宮坐給倍之有を殿舎考證儀式帳所謂齋内親
王川原殿院疑古磯宮之地之有を以て曉る可し然る
小其磯宮之云々上百二十引る儀式大倭本記小一
鏡者天照太神之御靈名天懸太神也今伊勢國磯宮崇
敬拜太神也之有を思ふ磯宮と申せり五十鈴宮
の御事小あり御在り坐ける然る五十鈴宮と申す
磯洲宮イソノミヤと申す事小賀茂川の事を山城風土記小
石河瀬見小川と称云々如く河洲の清く潔き由を以
て磯洲川と云けむ何時一と伊須受と云事小

轉り成水あり可し此を以て五十鈴宮の御事を磯
宮と申せりしありけり然る皇太神宮の大宮地
小御在り坐一其称を別たす一齋宮と磯宮
とも共けるを皇太神を五十鈴宮と申す小就て其川
原殿を磯宮と称け又世記小大足彦忍代別天皇庚寅
歳倭姫命年既老耆不能仕吾足日宣天云遺遺五百野
皇女御杖代天止志多氣宮造奉天齋慎美令侍給支之有
ハ多氣齋宮の初ありハ此時ありや皇太神宮小齋慎
一侍給不意を以て其齋王の宮を齋宮と申す
御事小成なりけむ斯ハ皇太神宮を齋宮と申す
後小齋王の宮を然申すと

其唱ハ同一キ物クニ齋奉ハ相違有ル事アリ思混フ可
不由有ル又五十鈴宮ハ磯洲宮ノ義有ルヲ轉リテ伊須
受能宮ト云ヒ切メテ磯宮ト申セシメ又世語記ノ
如ク倭姫命ノ御在リ磯川ノ磯ト云ヒ磯川ノ原殿ヲ殊ニ磯宮ト申セ
ルハ其五十鈴川ノ磯ト云ヒ磯川ノ原殿ヲ殊ニ磯宮ト申セ
略ハ磯也又大石激水也云ヒ磯ハ字書不水中積也ト見え韻
波漠曰磯ト有テ海ノ中可居者曰磯和名須又御
云アリ洲ハ和名抄不水中可居者曰磯和名須又御
紀万葉等曰洲者又洲中有草木曰洲者見之是也
居曰倭姫命世記不皇太神ノ大宮造ノ事ヲ今歲倭姫命
詔大幡主命物部八石造平五等五十鈴原乃荒草木根
斯掃比如大磯洲原ト云事ト知レハ又右引
思合さハ磯洲原ト云事ト知レハ又右引
拾遺不仍就於倭宮緒色殊立磯城神籬奉遷天照太神
及草薙劔令皇女豊劔入姫命奉齋焉と有ら如く其始

二種神宝共ハ伊勢神宮ハ鎮奉ルセ給ヘラリ若ク
其御劔ハ素戔嗚尊ノ御靈不有御在リ坐ける皇
太神宮儀式帳不此掛畏天照坐太神月讀大神二柱所
祢伊弉諾尊伊弉册尊共為夫婦合所生神御形鏡坐
有ハ御形鏡坐ト云ハ皇太神ノ御上ノを申奉ル
ル状有ル此ハ月讀大神ノ御事ト云ハ並云ハ
刺物ト謂ヘラ然ラ不此二大神ノ御名ノ共出たる
ハ草薙御劔ノ並坐ハ御時ノ傳ト云ヒ聞エたる儀
式帳ノ今ト成ラハ御劔ハ尾張ハ御在リ坐ラ故不其
を並奉ラテ唯御形鏡坐ト皇太神ノ御を云ヒ申せる

物奉藏土之御宮木之御宮云ニと有り二種宝物之
 現章不就ベキ事あり猶其委しき事ハ宝劍出
 相殿坐神二座並大と見え伊勢太神宮式ハ太神宮三
 座在度會郡宇治天照太神一座相殿神二座祢宜一人
 從七大内人四人物忌九人童男一人父九人小内人九
 人之所見たり伊勢太神宮之申す例ハ古事記水垣宮
 段小豊鉏比賣命を拜祭伊勢太神宮也之有ハ此時未
 伊勢小鎮奉りて給りたり一以前の事あり後の事
 を始不回りして書れたるあり其玉垣宮段小豊比賣
 命者拜祭伊勢太神宮と有る此あり正しく其始あり

神宮以伊勢神宮
 鎮座以移有神宮
 之日記曰成務天皇
 三年癸酉九月十
 一日定太神宮之尊
 稱亦豐受神宮
 之尊稱者始仁賢
 天皇三年二月己巳
 九月十六日所見
 なる是る

ける其日代宮段ハ倭建命の東征の所小故受命罷行
 之時参入伊勢太御神宮拜神朝廷と見え皇極天皇四
 年御紀持統天皇六年御紀等ハ唯小伊勢太神と出
 たり祈年月次等祭詞ハ辞別伊勢ハ坐天照太御神能
 大前ハ白久云々ハ見ゆ又景行天皇四十年御紀仁
 徳天皇四十年御記天武天皇四年元御記及古事記玉徳
 宮段ハ伊勢神宮と書され又景行天皇四十年御紀
 小ハ其伊勢を除去て唯小神宮と載りハ太神
 小唯小神宮と受張て申すハ此伊勢太神宮小限奉
 る事あり餘ハ且し例の御ハ坐ハ尊無二因自餘諸神
 古語拾遺ハ天照太神者惟祖惟宗尊無二因自餘諸神
 者乃子乃臣孰能敢抗と有りハ如く天下無二尊ハ

一侍在し坐す神クありありク皆右不謂ゆる祈年月次祭詞
御事申すク更ありク一ク皆右不謂ゆる祈年月次祭詞
不皇神能見靈能坐四方國者天能壁立極國能退立限
青雲能靄極白雲能墜居向伏限青海原者棹枚不干舟
艦能至留極大海能舟滿都能氣能自陸往道者荷緒縛
堅能磐根木根履依久弥能馬能凡至留限長道無間久立
都能氣能狹國者廣能峻國者乎能遠國者八十細打掛
氏能引寄如事皇太御神能寄奉能荷前者皇太御神能大
前能如擴山打積置能殘能平聞者又皇御孫命御世能
手長御世能堅磐能常磐能齋能奉茂御世能幸能奉故
皇吾睦神漏伎神漏弥命能宇事物頭根衝拔能皇御孫

命能宇豆能幣帛能祢辭竟奉能宣能所見たる此を以
て皇太神の皇御孫尊を守奉る給へる御事の大概
ハ伺知奉るなり此を以て其御敬信の廣く厚く御
在し坐す御事ハ申す事舊不たれ近くハ建曆
御記不允禁中作法先神事後他事且暮敬神之敷慮無
懈怠白地以神宮并内侍所方不為御跡萬物隨出來必
先置臺盤所棚召女官被奉或如内侍參奉之云々自僧
尼及憚人許所進之物不奉之云々自神代神鏡如神宮
奉仰為伊勢御代官被留置也神事次第同伊勢世始同
殿御坐之間主上朝夕不放御本鳥仍冠巾子能融緒被結

公猶具畏所の御
事ハ傳可二百十
八忍鏡の下注
申す可なり

御冠宍此故也垂仁天皇御宇始為別殿御温明殿略下
所見たる其御寫の畏所御在坐を御方ありと
①其御敬礼も神宮不准へて行ハセ給ふ事右の
如し此を以て神宮の御崇敬の又格別不渡りて給ハ
る御事を明しめ奉る可き事あり但右の垂仁天皇御宇
と有ハ江家次第不然記誤りて兼て給へる御誤
り本朝事始小崇神天皇六年己丑始温明殿制以三種之
神器安置此殿後代之内侍所以右之温明殿表之始也
と有ハ上百二十不引る御紀の文不合を以知べし
江次第不垂仁天皇世始御別殿と有ハ誤ある事右不
云る如し諸温明殿ハ如何小訓むある事也此御記

の題号あり賢所マ書させ給ひ又上引る天徳御記
小威所と作せ給ひ又或ハ畏所と書るあり彼崇神
天皇六年御紀不然畏其神勢共往不安と有て其より
別殿不出し奉らる給へる事ハ温明殿を畏り奉りて
給ふ所と云意と聞ゆハ賢所ある可し如此く御敬
礼の餘り小御事天下不比類無く御在坐ある小皇
太神宮の五十鈴宮より不鎮定り給へる垂仁天皇二
十六年丁巳より四百八十年を経て雄略天皇二十一
年丁巳冬十月小御誨の御事御在坐て翌二十二年
戊午秋七月七日豊受大神を外官の度相不鎮奉りて
給ひ此より伊勢西宮と申奉る御事あり其事件ハ等
由氣宮儀式帳不天照坐皇太神云と尔時大長谷天皇

御夢_尔誨覺賜_久吾高天原坐_且見_志麻岐賜_志處_尔志
 都真利坐_奴然吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不
 聞食坐故_尔丹波國比治_乃真奈丹坐_尔我御饌都神等由
 氣太神乎我許欲_止誨覺奉_支尔時天皇驚覺賜_且即從
 丹波國令行幸_且度會_乃山田原下石根_尔宮柱太知立
 高天原_尔知疑高知_且宮定齋仕奉始_支是以御饌殿造
 奉_且天照坐皇太神_乃朝_乃大御饌夕_乃大御饌乎日別
 供奉_之見_之了_此御饌都神_之申_了ハ傳十九_九下十_下
 已_不註了如く御饌處神_之申_奉了御事_之即天照坐
 皇太神の大御饌を_調備へ奉_了也給_不意の御名_之

雜例集_少載_天
 同本紀_少雄略_天
 皇御夢_尔於_天
 結_久云_乃度會
 乃山田原_尔荒御
 魂_官和御魂_官
 造奉_天令鎮_理
 定_理坐_其宮_之
 内良角御饌殿
 乎造_立天_其殿
 内_尔天照坐皇太
 神御坐奉_{東方}
 止_田居大神御坐
 奉_{西方}又御伴神
 三前御坐下奉_流
 天依_命乃定奉
 後德_日乎從春始
 勢神主等勞作
 天_後德_尔後_天神
 主_乃子_等未_天
 婚_乎物_志定_令
 春_炊戴_持云_每
 日朝_夕供_奉之
 見_之又

云御在_一坐_ける若_了其御饌處_之申_了ハ右_子謂_ゆる
 御饌殿の御事_之其_ハ皇_大神_宮諸雜事記_不雄略天
 皇即位二十一年_丁天照坐伊勢大神宮_乃御託宣_依我
 御食津神_波坐丹後國與謝郡真井原_須早奉_迎彼神可
 奉_令調_備我朝夕御饌物也託宣賜_既了仍從_真井原奉
 迎_天伊勢國度會郡沼木郷山田原宮_仁奉鎮_給倍_利今号
 豐受太神宮是也_云即依_託宣豐受神宮之良角造_立御饌
 殿每日御朝夕御饌物調備_令捧_賣令_奉向太神宮云_二
 彼天皇即位二十二年_戊七月七日豐受神宮_乎奉_迎也
 之見_之了_此を以_て御饌都神_之申_了ハ皇太神の大

御饗不仕奉らせ給ふ御職掌を以て負持坐る御名不
御在坐りし但如此云時ハ其大神ハ一甚品
劣らせ給ふ如く思ふ輩も有ぬ可けり其ハ中
不俗意あり天照皇太神御身自聞食下大御饗の事ハ
其神を以て調備へ奉りしめるところを以て結へ此
雜事記あり其後皇太神宮託宣重御依我祭奉仕之時先
可祭豊受神宮也然後我祭事可勤仕也之有り如く先
其神を令祭給へる此一事を以て皇太神の殊不重
こし崇めさせ給ふ大神不御在坐り御事を明らめ
奉り又五十鈴宮之相並いせ給ひて伊勢兩宮之員也

へ奉らせ給へるあとい縁の御事ハ御在坐り
由あり神名式不伊勢國度會郡度會宮四座相殿坐神
月次太神宮式不度會宮四座在度會郡沼木郷山田豊
原去太神宮西七里
受大神一座相殿神三座祢豆一人從官大内人四人物
忌六人父六人小内人八人之所見たり諸右の雄略天
皇の御夢不諭
奉らせ給へる御事儀式帳大同本記雜事紀共不
合へるを世記又上代本記を始て神宮の諸書不傳姫
命の御夢不誨させ給ふ事取換たり外宮神人の
心有り私設たる説あり可但其御誨ハ年月ハ雜
事記不雄略天皇即位二十一年丁巳と見之世記ハ
同年冬十月と云ひ上代本記ハ冬十月朔と有ハ
三共不合り若て其翌戊午年七月七日御遷座の御事
ハ諸書共不同一事あり諸上不云る如く皇太神の五
十鈴宮不御遷座の年ハ重仁天皇二十六丁巳不
て其御饗都神の御事を乞いせ給へる雄略天皇二

十一年丁巳あり今予其伊勢崇祕太神の御事實を
明らめて此寶鏡開始章の傳を仕奉れりと安政四年
己年あり然るに此伊勢太神の御事を斯く傳し仕奉
る事ハ七月の朔日ありと竊不奇しと思惑くる事無
きふに非其より以降伊勢兩宮と申して相等しく崇
敬ひ會釋ひ聞えさせ御在し坐して兩宮の御事と申せ
ハ朝家大事として二無き大御政不物為させ給ふ世
降りての書あり中右記不天永二年三月四日早旦
祭主三位來云去十一二月間内外心御柱依日時勤文
奉改立了者是朝家大事無事障了誠可聞感也略之所
見たる是あり斯計の御事不御在し坐させ故不神宮正
遷宮の年ハ内裏の御造宮をすこふ憚奉らせ給へ

り同記(永久二年八月六日於院御所被議内裏造宮
條ハ今年伊勢内宮正遷宮也又明後年外宮正遷宮也
然者明年其隙可被作歟往年伊勢遷宮之間内裏雖有造宮
例猶於正遷宮者可有憚也人々被同此旨と有る程
の御事不御在し坐めり又長秋記不長兼三年六月二
十一日按察使談曰明日可有仗議事朝家大事必可參
豐受太神宮土宮彼外宮地主也然而年來無預官幣而
今度准七別宮所可預官幣之由自本官依申請已蒙裁判
仍重申請云御殿元高五許尺也准七所別宮毎年荷前
幣物可納御殿内也件幣物二十年遷宮外無取出事者

不大造於御殿件物無可置之處者准內宮荒祭外宮高
宮等可被造此御殿一丈許有何難哉略中云同宮自本東向
也而太神宮并七所神宮皆南向也今度准位社可造南
向歟又件社本有鳥居而內垣內無有鳥居之例者今度
可立鳥居哉否事也伴之事可依仗議也略下見えたる
此ハ別宮の處分ハ有_レ存_レ神宮ハ抱_レりたる御
事ある故ハ朝家大事ト云_レあり又玉海不兼安五
年改元安元元年五月十二日壬辰晴申尅許左少辨兼
光來仰曰太神宮事可計行之由有法皇詔者對曰朝臣
大事莫過神宮故先代之上卿是國之重事也云_レ有

朝臣大事ト云_レ人臣大事ト云_レ事少_レ神宮の上卿ハ
仕奉_レる云_レあり又玉葉不建曆元年三月二十日壬戌
早且遣消息於頭辨許辭神宮上卿事其狀如左一日仰
下神宮上卿事朝之大事莫過神宮故先代上卿皆國之
重臣也云_レ有_レ朝之大事ト云_レ朝廷大事ト云_レ不同
一是を以て神宮上卿の事を先例不任せし重臣ハ被
仰任_レ可_レしとあり但寛平五年三月二日太政官符ハ
二月祈年六月十二月改元十一月新
嘗祭者國家之大事也云_レト云_レ同六年十一月十八
日太政官符ハ宣奉勅國之大事莫過祭祀ト有_レ右
の箇度の祭事を以て國家之大事ト云_レ國之大事ト
云_レるを神宮の御事ハ朝家大事又朝之大事又ハ
朝臣大事ト云_レ事ありハ心をもへる異ふる所有る
可_レし然るハ右の二月祈年六月十二月月次十一月新

嘗等祭ハ神宮を始奉り遍く天下の諸社ハ官幣を奉
給ふ大事政不し有けハ遍く天下諸人の上ハ
迄係ハ大事政云事ハ國家之大事云云然
るハ神宮の御事ハ大神宮式ハ元王臣以下不得執
供ハ大神幣帛其三台皇太子若ハ有應供者臨時奏聞
有て遍く天下の預ハ御事あるハ朝廷御一已ハ
執行ハせさせ御在ハ坐ハ大御政あるハ朝廷大事
云云ハ又其を奉行ハ人の上ハ其意ハ朝廷大事
云云ハ又貞觀二年十一月九日大政官符ハ不可割
取伊勢太神宮神戶百姓云々望請件太神宮封戸下雖
有餘剩永無減省以供神宮請官裁者右大臣宣奉勅凡
太神宮事異於諸社宜依延曆二十年四月十四日格永
無改減若有乖忤者科違勅罪者有之如く神宮の御
事一度奉り給ふハ追て減少の御例御在ハ坐ハ

る古よりノ常典と聞えたり中右記ハ保延元年六
月一日癸卯藏人辨送消息云太神宮祓宜六人也番使
繁多也今可被加一人之由祭主卿所申請也可量申者
予申云件祓宜本數僅一二人也如此申請時被加常事
也祭主申請者可被加也就申太神宮事有増加例無改
減然者被補何事之有哉四日藏人辨示送云舊外宮祓
宜今一人被加申請也可量申也予申云内宮已被加了
外宮申願有其理申可被加者之見之吉部秘訓抄ハ
産穢神宮忌三十日間條曰建久三年七月二十五日同
記云權辨定示送云一昨日罷著行事所役天又向上卿

源細言通親亭産穢神宮近代三十日忌之由被申仍相尋
本官之人等之處申條同前今日可參入殿下於門外可
申入子細之由存之神事之法有增無減最重之條不可
過神勢遷宮歟就中運日巽著行事所敬神之礼弥今一
重歟又明後日奉幣殿下御産混合候者尤不審可依時
宜之由奏了ふとし有て神宮の御事ふ於し有増無
減の朝憲ニ不ふ有けり猶中右記不長美三年九月十
被尋仰云伊勢正遷宮年九月十七日三日関白殿給御消息云自内
平以來所出來也云々其間被行佛事若僧事例雖被尋
不分明也但神今食齋中被行僧事例候之由或人所申
也相准如何者仰旨如此相重可參然之狀如件予進返
事云康十以後九月十七日以前被用神事者不可被佛
事候也其故者一度被行候事不被留也是有増無減之

習也強可被急行僧事不可候者此間猶可被過候歟と
見えて一度被行たる御事ハ以來留あり此
御法又神宮の御事一所事有ハ必二宮不申とハ必
給ふ御例あり中右記不永久六年十一月十六日今月
朔日賀茂下社拂地焼失今日火事之由依被申有奉幣
賀茂社予為其使仍午時參内之次先參院御所未尅參
杖座上卿遲參之間數尅候陣臨申尅右大臣被示云唯
可被申下御社歟尋大内記宗光之所申云嘉美宣命唯
賀茂社止被書之間上下之間不愼見如何予申云神勢伊
太神宮一所有事時必被申二宮也以之略之乍上下社
必可被申事也重被尋官外記之所嘉美元年之例上下

被
 下百六十三中
 後の下の引る雜
 事記天平三年六
 月廿六日御祭の
 二日足長足部
 島足の豊受神
 宮の辺に倒死し
 る時二宮の神
 主中枝を科
 せられたる右の
 例あり且

社共被申也叶愚案也召大内記宗光被示被進宣命者
 別可被書也下社者火事驚聞食如本可被造宮之由
 也上社者下社之火事驚思食之由者尤可然也先或
 臨時事有宣命二通但毎年例事如祈年穀奉幣者一通
 讀申上下社也今度尤可有二通也大内記召草進宮右
 府被見之後被内覽殿下之所見たる此ハ賀茂社ハ御
 伊勢神宮の御會釋を以て進せ給へる不伊勢不
 一所御事御在坐を御時ハ必二宮不申させ給ふ
 御例を引せ給へるあり又右引る(雜)事記不其後
 仕之時先可祭豊受神宮也然後我官祭事可勤仕也
 有て皇太神宮を祭奉らせ給ふ也必先豊受神宮を

祭奉る可く提させ給へるハ全く其御敬礼の御事不
 是皇太神の大御定あるむ有ける其御敬礼の御事不
 二ハ申させ更ふる事あるむ右不引る建曆御記不
 載させ給へる禁申作法不白地以神宮并内侍所方不
 為御跡之所見たる此一事を以て其御崇敬の譬一
 ハ無く御在坐を御事の太抵ハ伺知り奉るも不
 り但此ハ上古りの御作法ありて近く物不所見たる
 ハ続古事談不白河院御前不為隆事を奏しける不
 題目殊の外重なりて煩さけ思食たりけるを此
 次不申文の有る限を奏し竟むと思ひて知ぬ貌ありて
 申居たりけるに申文今五六通許不成て院立せ御在

し坐むと為けりを為隆見ぬ貌ふて祭主大中臣其謹
申請天裁事と読聞せ参りせたりけぬ太神宮の訴
ふると返居させ給ひふけり其を力めて申竟てが
出ふける凡て筒様ふ押力有て由てしくりける人
りと有る為隆ハ次ハ見えたる防門左大辨の事ある
が神宮の御事とたふ申せハ如此く恐る奉らせ給へ
る御状ふて甚辱る事御事あり又同書ハ堀河院在位
の御時防門左大辨為隆職事あり太神宮の訴を申入
けるハ御笛を吹せ給ひて御返ハ無りけぬハ為隆白
河院ハ参りて内裏あり御物氣起らせ御在り坐たり

御祈始ふ可しと申けり院驚を給ひて内裏ハ問ハ
せ給ひけぬハ然る事夢あり侍りすと申けり怪し
て為隆ハ問ひ給ひけぬハ然る事夢あり侍りハ一日
申太神宮の訴を奏聞し侍りしハ御笛を遊ばして勅
答無りて是御物氣ふと云ふハ有へて事ハ非ずと
思ひて申侍りしありと申けぬハ院より内ハ其由申
させ給ひけり御返事あり然る事侍り又唯事あり非
ず笛ハ秘曲を傳へて其曲を千遍吹し時為隆参りて
事を奏し今二遍不成たりけぬハ吹竟て云むと思
ひし程ハ尋しハ罷出ふ其を然申ける甚辱りし

事ありとが申させ給ひけり」と有り又通海参詣
記不後鳥羽院御遊の内不神宮の解狀到来の間按察
使光親御故實を存し機嫌を顧みず奏聞の所不逆鱗
の氣しき有て入せ給ひむと為けり不二所大神宮注
進言^上を讀申けり不宸儀立直りて被聞食ける傳
奏も公平を存して私を志れ君に敬神の御心深く侍
りけるふや甚しくころ養給ひぬと有ると斯る例猶
多よりぬ可き事あり神宮の御崇敬の御事お於ては
君上の御慎しき御在し坐を事右の如くふるを以て
今其御事を申奉るふし必す可き者ありりし
右の
白河

院天皇堀河院天皇後鳥羽院天皇ふと三柱は共不健
たふある佛天子の如く世に申奉る事ふれども右
等の御敬信の深く御在し坐を以て思へば佛は唯其
世俗の流行物あるに依りて真の大御心は右の如く
む御在し坐ける儲右の白河院天皇の御事お就て思
出たり神名式ある大和國山辺郡石上坐布留御魂神
社名神大月次相嘗新嘗の相殿不後不其天皇の御靈
をもし合せ奉る由其社記不所見又鳥羽院天皇御靈の
事ハ鶴岡八幡宮寺社務次第ふ一奉崇神宮社御事後
鳥羽院御靈宝治元年丁未崩御以後九年二月十五日
奉勸請延應元年乙亥二月二十二日於隱岐國遠島崩
御年満六十と見えたり右の故事を今記し畢て余り
不尊く所思る任ふ其佛在所を今云ふ右等ハ近古の物
み見えたる故事
みこそ有けれ上古ハ猶其よりハ勝て御崇敬も深
りけり一罪咎有て刑罰ある可き者も神宮も参入る
時ハ免させ給ふ御制ふとしや有けむ仁徳天皇四十

年所紀不納鴻鳥皇女欲為妃以準別皇子為媒時準別皇子
密親娶而久之不復命略中爰天皇知準別皇子密婚而恨
之然重皇后之言亦敦于支之義而忍之勿罪俄而皇皇子
枕皇女之膝以卧之乃語曰略中天皇聞是歌而勃然大怒
之曰朕以私恨不欲失親忍之也何暨矣私事將及于社
稷則欲殺準別皇子時皇子率鴻鳥皇女欲納伊勢神宮
而馳於是天皇聞準別皇子逃走即遣云云曰追之所逮
即殺略中爰雄鯨等知免以急追及于伊勢蔭代野而殺之
之見元也此欲納伊勢神宮ハ神境を犯一ハ刑官の
入る事能ハさる御定有り又罪有りと雖も神地不納

る者ハ免一して指置せ給ふ御宥怒の處分所在一坐す
公法を知て逃させ給へるハ天皇ハ其事ハ所知食
ざり一故不追及て令殺給へるあり甚遺憾し事不
りと雖も當昔斯る例幾許も有るハ神宮不納むと
為させ給へるあり但此ハ掛あるハ恐き神朝廷の御
事あれハ格別コトを猶餘社みてハ必然有けり一雄略
天皇三年御紀不阿閉臣國見赤名磯特牛譖梓幡皇女與湯
人廬城部連武彦曰武彦汗皇女而使任身湯人此武彦
之父汗皇女也官喻聞此流言此禍及身誘卒武彦於廬城河
偽使鸕鷀設水捕魚因其不意而打殺之天皇聞遣使者

延暦三年五月
 太政官符不又秘
 宜等與大國打
 及有犯事須
 科決者先觸其
 任即決罰之有
 神社不仕奉
 神人雖其任
 と解水ざる間
 決罪せ給はる
 御定むこと以て
 古の御有狀を
 べくる也

案問皇女云々得皇女屍割而視之腹中有物如水水中
 有石枳莒喻由斯得雪子罪還悔殺子報殺國見逃匿
 石上神宮之有廬城部連枳莒喻其子武彦の仇國見
 を報殺したるも其罪の身ふ及びむ事を懼れて石
 上神宮に逃入たりしを公よりも強て探索させ御在
 し坐さうけし枳莒喻を追捕し給ひさる趣あり然
 るを中古より此事寺家不移りて神宮に此古法廢
 水たり若此く神宮不在し事の僧徒不移れり彼等
も刑を恐れて寺家入り圓頂を成り刑を加へさ
る多し全く神宮の法を取り多あり刑部省式不僧尼
犯罪應訊者皆據衆證是刑不須捶拷者有るとい神
家不在べき事多を思ふ不可し其ハ通證不後漢三韓

傳曰諸國邑以各以一人主祭天神號為天君又立蘓塗建
 大木以懸鈴數事鬼神其南界近倭註引魏志曰諸國各
 有別邑為蘓塗諸邑地至其中皆不還之蘓塗之義有似
 浮屠海東諸國記曰對馬島南有高山皆名天神俗高
 神家以素饌祭之山之草木禽獸人無敢犯者罪人走
 入神堂則亦不敢追捕之見えたる一韓地の風俗一
 對馬島の事多し其習俗等一故其伊勢の名
 を以て古の神宮の狀を思ふ可し
 義ハ神武天皇御紀歌不加牟伽能伊齊能于流能の
 傳不云へし崇秘を伊都伎麻都流と訓る言義ハ傳十
 四百二イキマ所祭の下に註せり崇字ハ上イキマ引る大
 倭本記不今伊勢宮磯宮崇敬拜太神也と有る如く崇
 敬の意不用いたる字あり秘字ハ秘し藏むる義を
 取れり偕如此く崇秘の字を所祭に當て被用たるハ

南政官
内庫

清
内庫
圖書

餘社あり、神靈を齋祭する方を主と云るを神宮ありて
 神體ヲ持齋奉るせ給ふ大御鏡ハ一ハ掛す人ハ可畏
 皇太神ハ皇御孫尊ハ此の齋鏡を事依一奉るせ給
 へる御時ハ吾兒視此宝鏡當猶視吾同床共殿以為齋
 鏡之宜給ひて皇太神の現御前を仰視奉るせ給ふ
 如く同大殿の内ハ大坐ししめ奉給ふ可き天津御壘
 の齋鏡ハ御在り坐り故ハ深く崇敬ひ奉りて秘藏め
 奉るせ給ふ意味あり有けれハ崇秘の字ハ神體ハ就
 て書るあり甚能當りあり此ハ神宮の御事を
 奉りて長く語りて
 事ハ有れり此ハ唯伊勢崇秘之大神也
 事ハ有れり此ハ唯伊勢崇秘之大神也
 事ハ有れり此ハ唯伊勢崇秘之大神也

